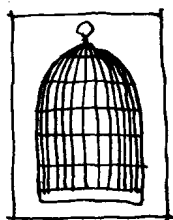


おかあさんは白雪ひめ

武川みづえ 作 岩淵慶造 絵





子どもの文学

おかあさんは白雪ひめ

NDC 913 偕成社 174p. 23cm 1979年

1979年3月 1刷

1979年7月 3刷

著者 ^{たけ}武 ^{かわ}川 みづえ

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

電話 (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京5-1352番

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-626290-0904

Printed in Japan ©武川みづえ 岩淵慶造 1979

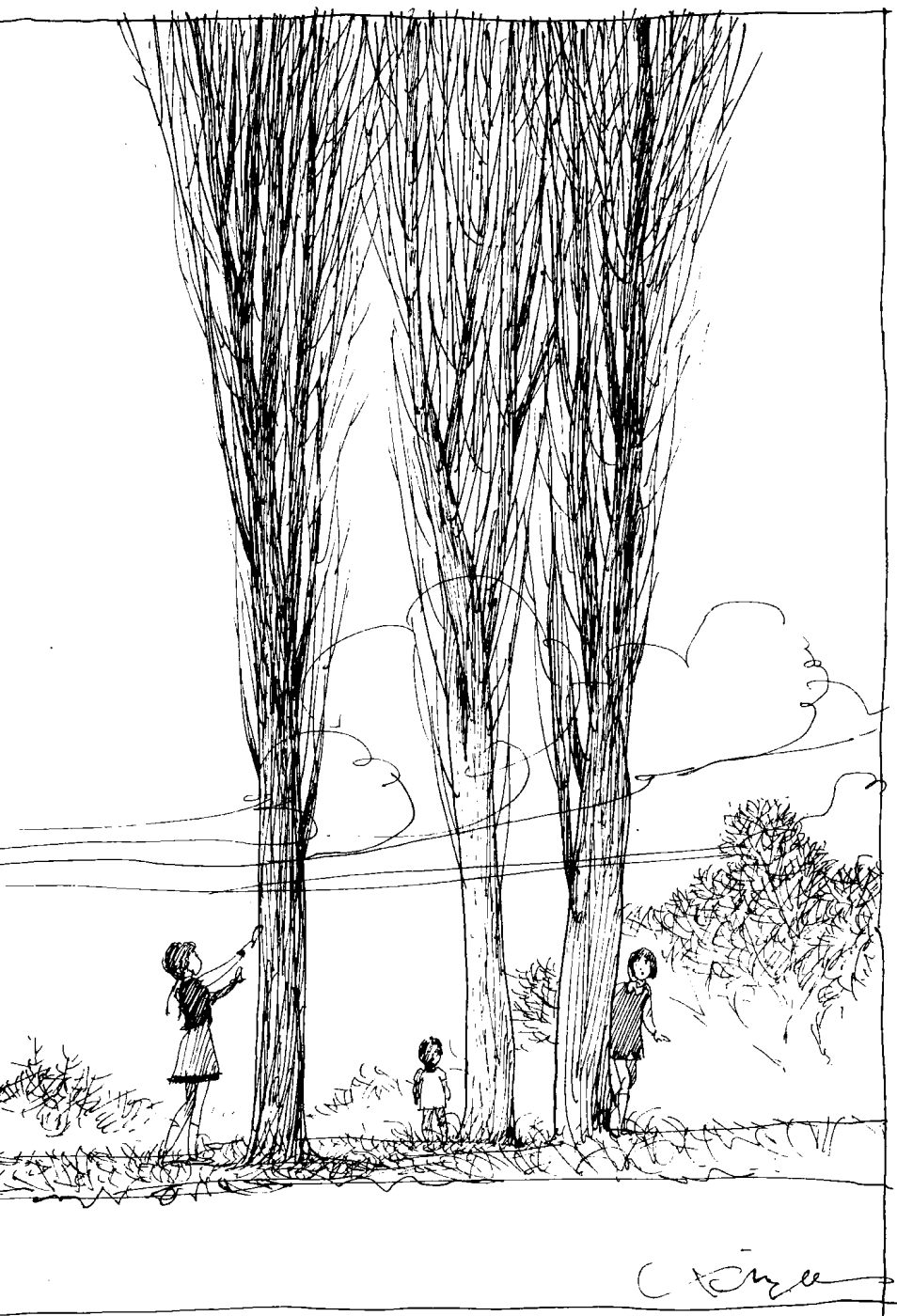
おかあさんは白雪姫

武川みづえ作 岩淵慶造絵



●はじめに
にじ色^{いろ}のカプセルは
変身^{へんしん}の魔法^{まほう}のくすり
なにがはいっているか
ひ・み・つ
ひみつを守^{まも}ってくれるなら
あなただけに
ないしょばなし





おかあさんは白雪ひめ／もくじ

一 母 の 日 8

二 魔法^{まほう}のかがみ 30

三 おかあさんは白雪^{しらゆき}ひめ 56

四 風^{かぜ}のつてきたピロ 78

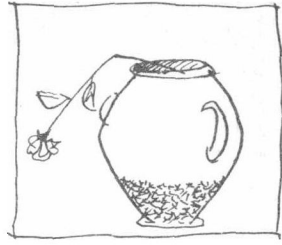
五 人形^{にんぎょう}ゆうかい事件^{じけん} 95

六 ガラスのかべ 124

七 だれも知らないお客^{きやく}さん 152

あとがき 174





作者・武川 みづえ (たけかわ みづえ)

東京に生まれる。津田塾大学英文科卒業。日本児童文学者協会会員。作品に「ギターナ・ロマンティカ」(日本童話会賞)『空中アトリエ』(小学館文学賞)『つばめの家』『おりんぼまつり』『わたしのゆうれい』など多数がある。
住所／東京都多摩市桜ヶ丘3-10-9

画家・岩淵 慶造 (いわぶち けいぞう)

1942年、青森県に生まれる。亜細亜大学を卒業後、広告の仕事をし、67年からさし絵を始める。最近作に『あころはフリードリヒがいた』『台風岬の子ら』『かえってきたサケ』『五年生のスケッチ』『手紙のなかの一学期』等
住所／東京都世田谷区上北沢1-15-304

おかあさんは白雪ひめ

川みづえ



一母の日

いいお天気、風がセロハンのように光って、かけていく。

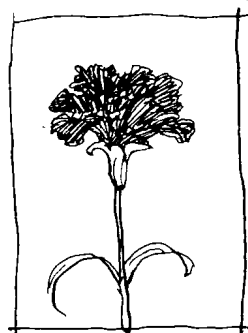
「五月晴れて、こういう日のことね。」

マキはひとりごとをいいながら、机のひきだしから、おさいふをだす。五百円はいつているのをたしかめて、手さげにいった。

「ちょっと、レイコちゃんとこにいつてくる。」

アパートの四階から、いっきに階段をかけおりた。おもてにでると、レイコが、かどをまがってくる場所だった。

「駅まえにしよう。あそこのほうが、花がいいんだって。」



レイコが、息をはずませながらいった。マキは、大きくうなずいた。マキだって、駅ま
えの、大きなショールームのある花屋で買うべきだと、きめていたのだ。

五月の第二日曜日は、母の日。おかあさんに感謝の心をこめて、カーネーションの花を
おくる日ということになっているらしい。

マキとレイコは、ことしはじめて、おかあさんに、カーネーションをおくることにきめ
た。新聞やテレビのコマーシャルなんかで、母の日にはプレゼントと、おおさわぎするん
だもの。せめてカーネーションでもおくらないと、わるいような気がしてしまう。

「かたたたきやお手つだい券のプレゼントなんて、ちびっこのすることよね。」

きのう、レイコは、ばかにするときのくせで、鼻にしわをよせていった。それから、
ちよっと顔を赤くした。去年、とくいになっていいふらした、お手つだい券のプレゼント
を、思いだしたのにちがいない。

マキは、そんなこと、わすれてしまったふりをしていてあげた。四年生になったふたり
は、たしかにもう、ちびっこではないのだから。

それに、おかあさんへの感謝の気持ちなんて、てれくさくて、口ではいえない。カーネーションをさしただけで、心をつたえられるかたちがあるなら、利用すべきだ。そういう結論にたっしたふたりは、いっしょに、買いにいくやくそくをした。

花屋さんは、はりきっていた。ショウウィンドーは、赤いカーネーションでいっぱい。なくなったおかあさんのための白い花は、すみっこにすこし。

へ母の日、おかあさん、ありがとう」というポスターが、はってある。

歩道にまでならべたおけのなかのカーネーションは、すぐ売れるように、セロハンでつつんである。一本、二百円、三本だと五百円だ。

「どうする？」

マキは、レイコをふりかえった。

「五〇〇わる三は、一六六、六六円か。ずいぶん、安くなるのね。サヤカちゃんもさそつて、三人で、一本ずつわければよかった。」

レイコがつぶやく。

「うわあ、レイコちゃん、ケチ。わたしは、一本にするか、三本のにするべきかって、きいたのよ。」

「ケチじゃないよ。頭あたまいいっていいよ。おとなは、子どものすくないおこづかいを、まきあげることばかり思いつくんだもの。いつもは一本七十円のを、二百円だなんてね。こっちだって、頭あたまつかわなければ、負けそう。」

「じゃあ、一本ね。」

「もちろんよ。だいたい、三本なんておかしいのよ。おかあさんはひとりだもん。一本でいいの。おかあさんが三人もいる人が、三本の買かえばいいんだ。」

「しっ、レイコちゃん、声が大きい。」

マキは、あわてていった。花屋はなやのおねえさんが、じろつとにらんだから。

「おねえさん、カーネーションください。」

レイコったら、とたんにかわいい声をだして、にっこりわらってみせた。マキは、かたをすくめてしまう。

「一本ですか、三本ですか？」

おねえさんは、わざときく。

「わたしは一本、おかあさん、ひとりだから。マキちゃん、どうする？」

「わたしだって、ひとりだから、一本よ。」

花屋^{はなや}のおねえさんは、くすくす、わらいだしてしまった。

「あっ、いちばんいいのえらんでね。三本五百円のと、差^さをつけてよ。」

レイコは、おねえさんのえらぶ花に、目を光^{ひか}らせる。

マキは、三本のにしようかと思った。テーブルの上の花^かびんは大きいから、一本ではさびしすぎる。でも、おかあさんはひとりというレイコのりくつで、一本買^かうことになってしまった。

おかあさんのすきな、クリスタルガラスの一りんざしを思いだしたら、一本でいいという気になった。あれなら一本がぴったりだ。

「おかあさん、ありがとう」



カーネーションの首にまいた白いテープに、ピンクの字で書いてある。

「ふふん、こんなこと、口でいえないもんね。書いてあってよかった。やっぱり、いつもの三ばいするだけのことあるわ。」

レイコが、いった。

セロハンにつつまれて、テープをひらひらさせている赤いカーネーションは、すてきだ。とくべつの感じた。悪ぶって、なんだかんだともんくをつけたレイコだって、やっぱり、そう思ったらしい。かえりは、だまって、いそぎ足だった。それぞれ、おかあさんに、一本のカーネーションをおくる場面を、思いうかべながら。

玄関のドアは、わらい声ではじかれるようにあいた。

「あつ、チコおばちゃんだー」

マキは、にこにこ顔になる。

おかあさんのすえの妹のチコおばちゃんは、ちびさんで、おてんばで、おしゃべり。

特大サイズで、おっとりした感じのおかあさんとは、ちっともにっていない。いつも、たのしいわらい声をつれてくる。もう十年も会社につとめていて、ひとりでくらしている。

マキは、はずむような気持ちで、居間のふすまをいきおいよくあけた。そのまま立ちすくんでしまった。息をつめ、まばたきをくりかえした。

テーブルの上の花びんに、赤いカーネーションが、あふれているのだ。マキは、たった一本のカーネーションを、思わずうしろにかくした。

なぜ、なぜ、カーネーションが、こんなにたくさん、ここにあるの？ 一りんざしに一本のはずだったのに。なぜ、もう、こんなにたくさんのかーネーションが……。

マキは、目をいっぱいに見はったけれど、むだだった。なみだはやすやすと、見はった目のふちを、のりこえてしまった。

おかあさんは、あわてて立ちあがって、コップをひっくりかえした。ますますあわてて、うろろしている。

「ひゃあ、マキちゃん、わざわざ一本、買ってきてしまったの。おしかったわね。ああ、